EXPERIENCE

" 海外留学制度を活用して最新医療の現場を体験

"

<u>ここにしかない目から鱗のような体験</u> たくさんの発見が詰まった海外留学

四国がんセンター 消化器内科 坂口 智紘

今回、国立病院機構の専修医等 海外留学制度を利用し米国ロサン ゼルスにあるWest Los Angeles VA Medical Centerで研修をさ せていただいたので、ご報告いたし ます。私は消化器内科医ですが、化 学療法をもっと専門的に深めたい と思い、現在は四国がんセンターで 消化器科領域の化学療法をメイン に診療を行っています。以前から疑 問に思っていたことの一つに米国で は腫瘍内科医がすべての領域の化 学療法を担当すると聞いていました が、どのように実践しているのか、ま た若手の腫瘍内科医はどのようにト レーニングを受けているのかという ことがありました。この疑問を解消 する絶好のチャンスだと思い、この 制度に応募しました。



毎朝の入院チームカンファレンスの様子

West Los Angeles VA Medical CenterではHematology/Oncology (血液内科/腫瘍内科)で5週間の研修を行いました。化学療法の内容は(少なくとも消化器領域に関しては)日本と大きな違いはありませんでしたが、日本と大きく違う点も多くありました。

一つは入院での担当医の制度です。日本では主科があり外来と同じ 主治医が基本的に治療を担当しま

NHO × 海外留学制度

すが、米国では総合内科医が一般 的な内科治療や診断を行い、症状 や疾患別にそれぞれ専門科(血液 内科/腫瘍内科や消化器内科など) にコンサルトします。専門科はコン サルトを受け、診断や治療などを 行っていきます。すべての領域の化 学療法を腫瘍内科が一手に引き受 けるとなると仕事量が膨大になるの ではないかと考えていましたが、総 合内科のフェローやレジデントなど の数は専門科に比べて多く、層の厚 い総合内科との連携により腫瘍内 科が成り立っていることが分かりま した。しかしそうなると一方で、治 療方針が定まりにくいというデメ リットが考えられますが、それぞれ の科の相談窓口が決まっており、す ぐに電話で連絡し相談できる環境 がありました。また患者さん自身も 自立してそれぞれの医師の話を聞 き、どうしたいかをはっきり伝える ため治療方針は比較的スムーズに 決まっていくようでした。ただ、たま に「お互いの科でコミュニケーショ ンが取れていない!」とか「たらい回 しにされた!」などと訴える患者さ んもいて、デメリットが全くないわけ でもないようです。



入院ケモは化学療法専門病棟の 広々とした個室で受けることができます



外来は注射センターで

また、若手医師のトレーニング方 法も日本と異なります。血液内科と 腫瘍内科の両方の専門医を目指す フェローは3年間のプログラム(血 液内科または腫瘍内科のいずれか だけであれば2年) のうち1年を3つ の病院での実習、あとの2年は研究 を行います。病院ではフェローは 1カ月ごとに入院コンサルト、骨髄 穿刺、移植に分かれて診療を行い ます。私は入院コンサルトチームの フェローに付いて研修を行いまし た。チームはアテンディング・ドク ター(指導医)1人とフェロー1人、 レジデント1人の3人で構成されて います。チームのメンバーは1カ月 毎(レジデントは2週間毎)に交代 していくため、カルテに経過や考察、 方針などを詳しくまとめて記載しま す。毎日2、3時間かけてチームで入 院患者についてディスカッションを 行い、その後回診をし治療方針を 決定していきます。また、 週2回の外 来にもフェローやレジデントが参加 しています。フェローやレジデントは 初見の患者さんとなるため、その場 でカルテを読み、一度自分で診察し てから控え室にいるその患者さんの 担当である指導医(外来では患者 さん毎に担当医が決まっています) にプレゼンをして指導医と一緒に方 針を決め、再度指導医とともに患者 さんを診察します。このため一人の 患者さんに小一時間かかることが 多いです。しかし、どの指導医も入 院でも外来でも一貫してフェローや レジデントに対する態度は同じで、 相手の話を最後まで聞きその上で ガイドラインなどを用いて理論的に じっくりと説明していました。患者さ んも待たされたことに対して理解を 示し、怒るような人はいませんでし た。入院でも外来でも一見すると無 駄が多いやり方のように思います が、若手医師は幅広い疾患や症例 を経験することができ、特に腫瘍内 科では、実は効率的なトレーニング の仕方ではないかと思いました。

他にもフィジシャン・アシスタントやソーシャルワーカー、ケースマネージャー (検査の日程調整などを行う) など多職種が合理的に診療やケアを行っており、働き方改革が進められている日本でも参考となるようなことなど、ここに書き切れないくらいたくさんありました。気になる方はぜひ、この留学制度に応応してみてください。自分が当たり前だと信じて疑わなかった環境やシステムでも、「あ、そうか。そうすることもできるんだ」と思える、まるで目から鱗のような体験ができると思います。



みんなで助け合いながら5週間を過ごしました

私はこの研修を通して学んだことを少しずつでも明日からの診療、また後輩の指導に生かしていきたいと考えています。最後になりましたが、快く送り出してくれた四国がんセンターのスタッフの皆さん、また、この留学制度をサポートしてくださっている機構本部の皆さん、West Los Angeles VA Medical Center のKaunitz先生、秋葉先生、鈴木さん、そして一緒にこの留学を経験した日本各地の4人の先生に感謝申し上げます。

国立病院機構(NHO)専修医海外留学

平成18年度から開始した専修医制度の一環で、グローバルな感性と幅広い知識を身につけ、 将来後進の指導にも熱心に携わることができる優秀な人材を育成することを目的としています。 留学先はGreater Los Angeles Health care systemに所属するVeterans Affairs Medical

Center (VAMC) で約 1カ月間、米国の医療現場を体験することができます。

※渡航費・滞在費は国立病院機構本部が負担します。



